



東京教区災害対応チーム  
**お知らせ**



【報告-1 「福島県被災地訪問の旅」】

被災地から離れて住む私たちは、5年が経ち、報道も少なくなるなか、記憶が遠のき、関心も薄れてしまいがちです。しかし、被災された方々は、今もなお、さまざま困難を抱えている現実があります。特に放射能災禍について、福島県の方の思いは一様でないことを私たちは知ります。考え方は人さまざまであっても、多くの方が「忘れたいが忘れることは出来ない」、「コミュニティの中で考えを口にできない」、そして「子どもの健康が心配、見通しの立たない将来への不安が大きい」と異口同音に言います。

こうした現実について被災地から離れて住む私たちが知らないままで良いのでしょうか。被災地に立って祈ろう。現地の方々と出会い、お話を伺うことで「いっしょに歩こう!」の思いを新たにしよう。また、放射能汚染の恐ろしさや悲惨さを通して、原子力発電の問題に謙虚に向き合い、自然と命の尊さを共に学ぼう。こうした思いから、今回、聖マーガレット教会のご協力を得て企画いたしました。

今回の旅について参加者の海宝良子さんに寄稿いただきました。また、郡山の越山司祭からは当日のお話についてご了承いただき掲載いたします。

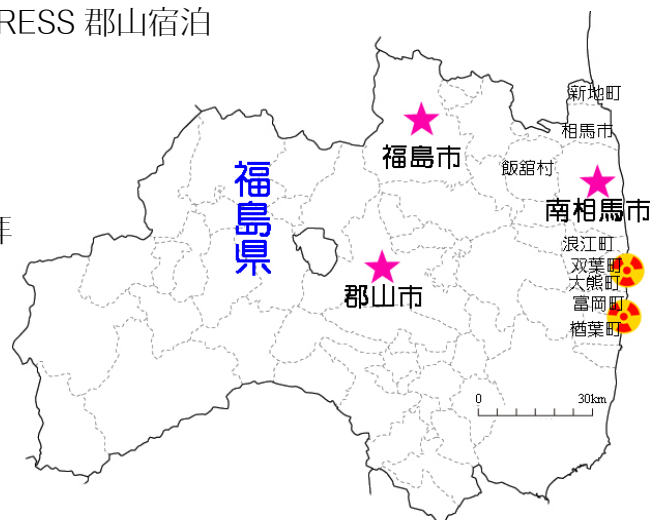
旅行日程

6月4日

- 8:28 東京駅発新幹線
- 10:01 郡山駅着レンタカー2台に分乗
- 13:00 南相馬カリタス原町ベース  
カリタススタッフによる案内で、南相馬、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町訪問
- 17:00 南相馬出発
- 19:00 郡山到着予定ドーマーイン EXPRESS 郡山宿泊  
夕食・懇親

6月5日

- 8:00 朝食 チェックアウト
- 10:30 郡山聖ペテロ聖パウロ教会 礼拝
- 12:00 昼食 愛餐会
- 14:00 被災地訪問振り返り、分かち合い  
越山健蔵司祭のお話
- 17:30 郡山駅発
- 18:48 東京駅着後解散



## 参加者

参加者：牛込聖公会聖バルナバ教会、聖マーガレット教会、聖アンデレ教会より8名  
 スタッフ：東京教区 災害対応デスク 松村豊

## 旅を終えて

聖マーガレット教会 クララ海宝良子

6月4日(土)、5日(日)福島県被災地を訪問しました。これまでも何度か福島県新地町、南相馬市、福島市を訪ね、コンサートなどの活動を行ってきましたが、今回は教区の教会員8名と共に訪問する機会を与えられました。

1日目は、郡山駅で合流した越山健蔵司祭と共に、富岡町から南相馬市、そして浪江町へ。途中常磐道や6号線を車で通る中、大熊町を通過する時に、線量計は、7マイクロシーベルトを超え、アラームが鳴りっぱなしになりました。そんな中でも除染や工事関係者が多く作業しているのに驚きます。



南相馬市に入り、そこからカリタス原町ベースのシスター畠中千秋さんに案内していただきました。東京電力福島第一原発から20km圏内の南相馬市小高地区へ。ここは7月を目処に帰還準備区域とされています。駅前や道路、常磐線はいつのまにか綺麗に整えられていました。それが却って恐ろしさと虚しさを感じさせます。学校や病院等はそれまでに準備が進むのでしょうか。常磐線も開通の目処が立っていません。インフラが不十分な状況でどれだけの方が戻ってくるのか心配です。前回訪問した時は、除染廃棄物を詰め込んだ沢山の黒い袋がむき出しのまま並べられていましたが、今は白い壁やシートで覆われています。原発事故の恐ろしさが隠されて行くようです。

震災前、畜産業の盛んだった浪江町は、震災後帰還困難区域に指定され、牧場も立ち入り禁止となりました。飼育していた牛の全頭殺処分を国から命じられましたが、一人の畜産家がそれを拒否し、「ここにいる牛が生きて以上、頑張る」と支援団体の方々と牛の世話を続けています。汚染された草を食べている、どこにも出荷できない牛の姿が悲しく映ります。

畠中シスターは震災直後から、原町ベースでの働きを続けていて、「5年経ってもまだ入れないところがたくさんある。国が帰還解除といっても、若い人たちは5年経ち新た



な地での生活が始まっています。年寄りだけでどのように過ごせるのか、帰りたくても帰れないのです。支援もまだまだこれからです」とおっしゃっていました。

2日目は、主日にあたり、郡山聖ペテロ聖パウロ教会で共に聖餐式をお献げし、その後お茶会でおもてなしいただきました。愛餐会では、心を籠めて用意して下さった松花堂弁当で歓迎していただき、教会の皆さんと交わりの時を持ちました。教会の方々から、それぞれの震災後の思いや現状を話していただいたこと、感謝です。原発のことを忘れない、教会では話したくないと思っていられる信徒の方が多いと越山司祭から聞いていました。ですから、このような交わりの輪の中で、私達訪問者に自然とお話をしてくださったことは驚きであり、このような機会に与れたことに感謝しています。



愛餐会后、越山司祭と私たちとで今回の旅を振り返り、分かち合いの時を持ちました。先生は教区を越えた交りのうれしさを語り、「皆さんが共にいることで、5年経ってやっとここまで心を開き、思いを言葉にできたのかと感動しました」とおっしゃっていただきました。私たちが被災地でできることは、「何かをしよう」ではなくその場に一緒にいることなのかな、と改めて感じました。

隣接するセントポール幼稚園は、震災後は30名ほどの園児でしたが、今は約90名までに回復されたとのことでした。先生方は、毎朝床や壁を水拭きし、園児を迎えてきました。このことで父兄から信頼を得ているとのこと。お母さんたちが、原発のことを気にしながらもあえて話題にはしない、忘れないとの強い思い、それぞれの方の思いを大切にしながら先生方が幼稚園のはたらきを続けられていることを知りました。東京と違い福島では、家族何世代も一緒に生活するのが当たり前の中、震災後はそれぞれ家族がバラバラになり、経済的負担、また精神的苦痛などを抱えながらの生活が続いているとうかがいます。福島を訪ねるたびに、他の震災・津波被災地とは異なる復興への長い困難な道のりを思い知らされます。



浪江町立請戸小学校  
・・5年経つ今も、あの時のまま・・

きっと教会に連なる私達だからできる支援があると思うのです。そして、それを必要としている方々が多くいらっしゃるのを感じさせられるのです。ぜひ被災地を訪ね、自分の目で、耳で、そして心で今の福島に触れてほしい、と強く感じます。 (2016/6/27 記)

## 2011年3月11日から5年4ヶ月が経過 ……今東京教区の皆さんをお迎えして

司祭 ピリポ 越山健蔵

主の平安がありますように

時間の経過とともに、少しずつ震災が風化しつつあるように感じて来ている折、郡山を東京教区災害対応チームの8名の方々が郡山を訪問されました。最近福島がマスコミからも取り上げられることが少なくなってきたように感じられます。それでも忘れないでいてくれる仲間がいるということ、改めて聖公会の絆の深さにありがたさがこみ上げて来ます。主に感謝です。

3月11日の震災から早5年4ヶ月の歳月が流れ、原発災害も終息に向かうかとおもいきや、汚染水漏れが発覚し、地元の怒りをかっています。放射能の難しさを思い知らされています。また郡山では以前とは格段のスピードで除染が行なわれています。しかし始まるのが遅すぎました。放射能はアスファルトにこびりつき、また地下に浸透し、思ったように線量が下がりません。礼拝堂前の駐車場も除染してやっと基準値をクリアー？となりましたが、目標の0.23マイクロシーベルト(年間1ミリシーベルトの上限数値)には届きませんでした。郡山はいまだゴールが見えず闇の中にあります。見た目には少しずつ日常が戻りつつあるかのように見えますが、今も困難な状況はさほど変わりません。むしろ先が見えない状況の中で人々は疲れてもう慣れるしかここで生きる術はないかもしれません。精神的ストレスが表面化しないだけに深刻さを深めている気がします。

行き場を失った除去された土が各家の片隅にコンクリートで囲われて放置されている状況にあります。5年後に移設と市からは言われていますが、いまだそのままです。汚染土を間近に見ながら園児達は園庭で遊んでいます。放射能の現実感はありません。幼稚園の人工芝の下1.5メートルには園庭の剥がされた汚染表土が防水シートに包まれて埋められています。園児達は今日もその上で何も知らずに遊んでいます。つらくなります。

声に出せない、何とかしろと叫べないジレンマを感じています。それでも幼稚園は出来る範囲全力で子どもの命を守る努力は今もこれからも変わりません。毎日の水ふきは今日課となっています。それが評価されたのか以前にも増して園児が増えています。

今後東京教区災害対応チームのお知恵もいただきながらどのような交流を続けて行けるのか祈りながら絆を深めて行くことができれば感謝です。第1回はお茶会でのおもてなしでしたが、教会信徒のかた方、皆さんとの出会いの中で、何時になく本音が語られ感動しました。これも5年間の歳月が時になんて出てきたのかもしれない。これからも特

別でない日常的な誰もが参加できる、息の長いイエスに繋がる兄弟姉妹の親しい関係が出来ていくと良いですね。ご来訪ありがとうございました。

これから先、手探りの中で困難な状況を少しでも改善しつつ、希望を失わず、近い将来以前のような普通の暮らしが出来ることを夢見ながら、祈り求めていくことしか今は考えられません。この震災によって多くのものが失われました。しかしそれに倍するキリストに繋がる大きなお恵みを全国の仲間からいただきました。全ては神の大きなご計画の中にあることを信じながら…。

主に在って  
(2016/7/9 記)

## 【 報告-2 九州地震ボランティア報告 ①②③】

震災からまもなく4か月です。これまでに東京教区からは5教会6名の方がボランティア登録を済ませ、現地の活動に参加しています。活動の延べ日数は50日ほどになります。(7/18 時点)一方、九州教区「九州地震被災者支援のため」の緊急募金は、東京教区では200万円を超え、管区全体では1500万円(6月末時点)となっています。

ボランティアとして「熊本聖三一ボランティアセンター」の活動に加わった方からの報告を掲載していきます。

聖マーガレット教会 飯渕みな子さんからはじめます。飯渕さんは、ずっと以前、九州にお住まいの経験もあり愛着の地と言っておられます。また、現在、ご長男夫婦が転勤で熊本市内に在住しており今回の震災に遭われたそうです。幸いご無事でした。しかし、ご長男は自衛官、お連れ合いは看護師であり、震災の日から昼夜なく救援活動に従事なさっています。飯渕さんは、早期にボランティア登録し、東京のご自宅で受付けを待ったのだそうです。では、飯渕さんの報告です。

### 「熊本聖三一ボランティアセンター」の働きに参加して①

聖マーガレット教会 エリザベス 飯渕みな子

・・・(編集者一部省略)・・・じっとしてられない気持ちで一か月を過ごし、やっとボランティアを受け入れて頂いた6月9日早朝、羽田から熊本に向かいました。空港に着いて少々不安だった時に山崎司祭夫人の初穂さんから道案内のメール。何という心遣いでしょうか、迷うことなく教会に到着できました。こうして迎えて頂き4日間がスタートしました。



昨年末に定年退職した私は、若者のような力仕事は出来ませんが、掃除や調理なら大丈夫と登録して、頂戴した役目はキッチンスタッフでした。ここではボランティアメンバーにも朝食と夕食を用意しているので約15人分の食事準備と、もうひとつ、被災した方にお渡しする「お配りおかず」20パックの調理を任せられました。初穂さんと、前司祭の夫人で毎日食事作りを手伝ってこられた原美恵子さんに教えて頂きながら早速調理に取りかかりました。朝食100円、夕食3~400円の予算で。(センターでの)食卓の給仕はしない。各自が取りやすいように配置しておく。万事さっぱりと気持ちのよいルールが出来ていました。



ボランティアといえば瓦礫などをどんどん片付ける姿を思い描きますが、熊本聖三一教会被災者支援室(くまさん支援室)では、それは二本目の柱で、一本目の柱は「被災者を孤立させない」の理念の下に、被災した方たちを訪問してお話を伺い、気持ちを添わせるところにあると思いました。

毎日2時半から、冷たい飲み物、「お配りおかず」、生活用品を持った3~4人で益城町の毎日違った区域を歩いて回りました。避難所から戻って家の片付けをする方、半壊の家やガレージ等で暮らす方を見つけては声をかけ、飲み物や必要な生活用品を手渡します。初めは少々警戒しているような方も、スタッフの先方の心を和らげる絶妙な話術に、次第に困っていること、手伝ってほしいことを話してくださるのでした。

卓上コンロ一つで調理に苦労されている方や、市販のお弁当やレトルト食品が続いて食が進まない方々に夕食の一つにと「おかず」を手渡して、20パックが無くなると訪問が終了です。

夕食後の報告会に訪問の結果を発表し、早束手配や作業の段取りを考え、二本目の柱の「実行」に移っていきます。炎天下の労働は厳しいものですが、老若男女スタッフ皆が、依頼者の喜ぶ顔を思い浮かべながら働く毎日でした。

「お配りおかず」を嬉しいと受け取ってくださる方々、一日精一杯働いたスタッフが、おいしいおいしいと言って夕食を食べる姿を見て、この仕事をさせて頂いて大変有り難く思いました。

そしてもうひとつ、朝食の折には「この食事を今日働くための糧として下さい」。夕食の折には「今日一日、皆が守られてここに集えること、この食事をまた明日の力となるよう用いてくださいますように」という司祭様のお祈りが本当に納得できて、今まで漫然と繰り返してきた食前の祈りが原点に引き戻される機会となりました。





益城町ほか各地の復興は微々たる歩みでしかありません。公的機関が動き出すのを待てない方たちは自力で動こうとしています。ボランティアの力がまだまだ必要であること、毎日八合のお米をときながら、支援室への寄付が必要であることを痛感しました。このことを皆さんに伝えなくてはという思いを胸に帰途につきました。  
(2016/7/5記)

## 「熊本聖三一ボランティアセンター」の働きに参加して②

東京教区事務所 災害対応デスク 松村豊

今回は、東京教区事務所 宣教主事 卓司祭とともに「熊本聖三一ボランティアセンター」(以下センター)の働きに加わりました。現地の状況、センターの取り組みの一端についてご報告いたします。

なお、センターの日々の活動の様子は、予てより支援室FaceBookから丁寧に発信されていますので、ここでは、参加した6月16日(木)～22日(水)に感じたことを補足的に記します。  
(注：6月29日時点での報告です)

震度7二回の地震から2か月、1,752回(6/16 現在)の地震が観測されており、滞在中にも地震がありました。加えて、梅雨時季と重なり記録的豪雨による床上浸水の被害も目にしました。センターは、熊本城のある市の中心部から約4Km、車でおよそ15分の所にある熊本聖三一教会の「親愛館」1階ホールにあります。2階は牧師館です。熊本地震の被害は、比較的限られた地域に集中しており、現時点での活動は、南阿蘇とともに甚大な被害のあった「益城町」を中心に行われています。



### 【状況について】

「益城町」は、熊本市の東隣りに位置しています。センターから約10Km、車で30分ほどの所、町の中心部一帯が現在の主な活動の場です。道路を塞ぐ倒壊家屋こそ取り除かれていましたが、重い瓦屋根で完全に押しつぶされた木造家屋、壁が抜けて斜めに傾いた商店、鉄骨が曲がり崩壊した小規模ビル、地表より上に飛び出したマンホール、隆起した道路など、町中どこもかしこもそのまま手付かずの惨状です。行政含め復旧活動の端緒すら感じる事ができませんでした。



テントに一人暮らす高齢の女性、車庫や庭先のブルーシートで過ごす家族、自費で6

畳ほどのコンテナハウスを借りて凌ぐ方も多くありました。なかには、崩壊した家の敷地脇に電灯も冷房もないコンテナハウスを置き昼間を過ごす夫妻もありました。夜は「避難所」に戻り支給される弁当を手にするそうですが、このように避難生活そのものが安定しない厳しい状況にあります。また前に進むにも「仮設住宅」への入居すら未だに決まらない。益城町や菊陽町に住む私の知人は、いまま繰返し起きる地震や豪雨土砂災害に、被災者の心は折れてしまい希望を持たずに命を絶つ人が町々に居る現実を話してくれました。

そうした中でも、どこから来るのか学校帰りの小中学生でしょうか、私たちに挨拶しながら通っていくのを見て日々の営みがあることに気づかされます。

(応急仮設住宅：益城町では6月14日、一部53戸が完成し入居開始。県では16市町村2,951戸が建設中で7月下旬までに完成予定。6月14日朝日デジタル 註1)

### 【活動について】

「平和の同心円」「ペイ・フォワード」作戦で行こう！これは、室長 柴本司祭が活動にあたり大切にしていることについてガイダンスの中で触れたもので、特に印象に残った言葉です。「誰からか受けた有難い行いを、直接その人に返礼するのではなく、別の人への善意の行いとして返していく」。善意のバトンを渡していくというものであったと思います。支援室の皆さんが明確な意思を共有していることを素晴らしいと感じました。

片付けに取り掛かる気力が萎えている人がいれば手伝い、壁の亀裂を毎日眺めることに大きな苦痛に感じている人がいると聞けば、その亀裂にコーキング処理を施す。自宅のブロック塀が傾いてしまい隣地に危険を及ぼすのではないかと毎日気を揉んでいる人があれば、いつ来るかわからない業者に代わって作業する。震災によって家中が散乱していることに加え床上浸水被害が重なり途方に暮れる家から相談があれば、行って畳の運び出しを手伝う。倒壊した店舗が

《一日の流れ》	
8:00	朝の祈り 朝食
9:00	朝ミーティング
10:00	活動開始
12:00	昼食
17:00	活動終了 タミーティング
18:00	夕の祈り 夕食
19:00	入浴等
22:00	就寝

倒壊した店舗が廃材処理に困っていれば、瓦やガラス、金物やプラスチックの選別作業を行い、借りたトラックで廃棄所に

持ち込む。そして毎日16時頃には、テントや車庫、コンテナに居る人を訪ね、凍らせたボトル飲料やセンター手作りの「おかず」を配り、また思いを聴いてからセンターに戻ります。

さまざま個別に、そして山ほどの将来への不安を持つ被災



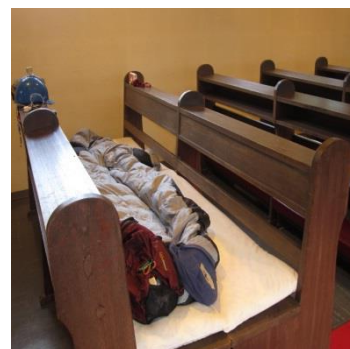


者に、私たち聖公会が大きな事は出来ません。しかし、依頼されたことを何とか成し遂げた時に依頼者は安堵の表情を見せます。私たちがやれたことは小さなことであっても、依頼者の「目先の気がかり・今日の心の重荷」を一つだけでも取り除くことが出来たのかも知れない。安堵した依頼者は、今度は別の被災者を気遣いセンターに相談してきます。振り返りの時間に柴本司祭はそうお話しくださいました。

### 【支援室について】

現在、活動は週6日(註2)、柴本司祭、中野司祭、山本尚生さんの3人が二日交替で担当しています。この活動を支えるセンターは、聖三一教会牧師の山崎司祭が現地コーディネータとして日々の運営と活動調整を担っています。このように活動責任者は交替制、また山崎司祭は司牧など外勤もありますので、コミュニケーションを取るのが大変に難しいと思われるなか、他教区(主として神戸教区)の聖職や教区内外の信徒がお互いによく協力し意思疎通を図りながら、働きを補完していることが大変印象的でした。

震災から二か月、支援室にかかわるすべての方、活動責任者の方の疲労は溜まってきており、また、各所から集うボランティアの寝食を毎日やりくりし「親愛館」と教会によって活動全体を支えている山崎初穂さん、聖三一教会の信徒や山崎司祭のご負担はかなり大きいとお見受けしました。



### 【思うこと】



主日に、山崎司祭に伴われ「菊池黎明教会」の礼拝に与る恵みがありました。その後「聖三一教会」の礼拝にも参加でき、両教会で豊かな時間を得ました。

(菊池黎明教会：震災後応急判定で危険とされ、現在使用できず国立恵楓園内の会館で礼拝を守っています)

自然の中に生かされている私たちが、その自然現象を左右することなどできません。ただ、地震が一刻でも早く収束して欲しいです。

センターに大きなプログラムがあるわけではありません。またセンターが外部に積極的に働きかけることもありません。そもそも、その必要があるかどうか、また可能かどうか私にはわかりません。しかし、今、その時その時の「相手の必要」に持てる力の範囲で皆が「猫の手」となって働いている。そこから信頼が広がり依頼の相談も多くなり、結果として「ちょっと便利屋」のような素晴らしく、そして確かな働きがありました。

被災地の状況は、これから先、夏、冬、そして一年後、どのようになっていくのでしょうか。私は現地から離れ戻れる場所に帰りましたが、どこでも、いつでも起こりうる自然災害、その時に互いが助け合えるよう、平素からそのような思いを持っていくよう努めたいと改めて

思いました。

どうか、被災された方、被災地に住み支援に携わる方、あるいは心を寄せる方の、心に平安そして体に休息が与えられますようお祈りしております。

(2016/6/29 記)



## ■その後の情報 (2016/8/10)

### 註1. 仮設住宅について

- 県庁発表(7月28日)では、仮設住宅整備戸数は16市町村 3,813戸に増えており、うち工事完了個数は2871戸。罹災証明書の交付申請受付件数は、37市町村で16万8千を超えています。
- 県庁に問い合わせたところ、今も約4万件の罹災証明の二次調査申請があがっているとのことで、必要とされる仮設住宅戸数は更に増える見通しであるも具体体には未定との回答でした。また実際の入居状況について県では把握していないとのことでした。

### 註2. 「熊本聖三一ボランティアセンター」の活動日について

- その後の「九州教区・九州地震被災者支援室からの第5信」(既報7/25)では、現在の活動日について、新たに月曜日が休日と定められ、現在の活動は週5日(火～土曜日)の活動となっています。

## 「熊本聖三一ボランティアセンター」の働きに参加して③

東京聖十字教会 ハンナ 加納美津子

九州地震で大切なご家族やお友達を亡くされた方々に、心より哀悼の意を捧げます。又、住む場所や仕事、生活の場が回復されていない方が、半月近くたった今も沢山いらっしやることに心が痛みます。一日も早く、「普通の生活」を取り戻せますように願います。辛い状況の中での、一日がどれほど大変なことかと案じています。

数ヶ月前、高齢の方でも現地でボランティアとして頑張っておられるという報道に接し、九州教区のボランティア募集の呼びかけに手を挙げました。被災地であり、被災者でもある熊本聖三一教会の信徒の皆様、司祭ご夫妻の本当に献身的なお働きに、只々驚きと感謝の念でいっぱいになりました。まだ余震のある中、礼拝堂や集会室で寝泊まりしながら、活動に参加される各地からのボランティア！老若男女(私が伺った時は「老」が主流でしたが・・・)が支援室長らの適切な指示に従って、暑さの中を出掛けて行きました。



現地にいらした方がどなたも感じられたことでしょうか、本当に被災当時にテレビや新聞で見聞きした様子と、変わっていないことに驚きました。正味二日程度(7月3日～6日)ですから、すべての状況を把握しているわけではありませんが、「どうなっているの?」というのが正直な感想でした。特に「益城町」は、古い歴史のあるところとお聞きしましたが、全く今まで私の乏しい知識の中にはない町でした。しかし、実際にお訪ねしてみると、日本の昔からの町並みというのでしょうか、懐かしい雰囲気のある場所であったと想像できました。ここで営まれていた「普通の生活」が自然災害とはいえ、あまりにも突然奪われた!そしてあの驚異的に続いた余震!どうお慰めして良いのやら・・・言葉が見つかりません。忘れずに祈り続け、少しでもお役にたてばと献金を続け・・・それしかできない自分がかたじけなくもありました。東日本大震災の被災者の方々が「忘れないで!」とおっしゃっていた言葉が思い出されました。

私事になりますが、「熊本めぐみの園」という盲老人ホームで40年以上前に研修をしたことがあります。視覚の不自由な方が、あの揺れの時、どんなに不安な思いになられたことでしょうか。職員の皆さんの献身的なお働きに、全国からの応援があったとお聞きします。身体が思うようにならない方、高齢の方、小さな子供たち、普段から病気を抱えていらっしゃる方等々、心情は察するにあまりあります。

最後に、東京でこの状況が起きたら・・・私たちはどんな行動をとるのでしょうか?記憶にある「阪神淡路大震災」「中越地震」「東日本大震災」他にも多くの災害を目の当たりにしてきました。その教訓を生かすことができるでしょうか?各地の教会で、共に礼拝を捧げ、痛みを分かち合う時間が持たれています。「疲れたら私のもとに来なさい、休ませてあげよう」その声が、今日も聞こえてきます。(2016/8/30 記)

### 【 報告-3 災害対応デスクの取り組みについて 】

災害対応デスクは、「東日本大震災支援対策本部(後に支援室)」の4年間の経験と意思を引き継ぐとともに、新たな課題への取り組みを目指し、2015年6月に教区事務所に設置されました。また、活動の推進にあたっては、12名のボランティアの方により「災害対応チーム」が編成されご協力いただいています。総主事のもと主に下記3点の取り組みおよび検討を進めています。

取り組みにあたっては、教区内情報「お知らせ」や「災害情報」など教会と教区の情報共有に努めています。

#### □ 1. 東日本大震災で必要とされ、出来る支援の継続を。

▶継続にあたって二つのことを考えています。ひとつめは、被災地から離れて東京に住む私たちが、東北地方などの被災された方々との交わりを通して、「忘れないでほしい」という声を大切な声として聞き続けることを東京教区における自分たちの宣教課題とし

てきており、これを継続すること。もうひとつは、私たち自身に視点をあてて考えることです。東日本大震災の出来事は、被災地の被害の甚大さもさることながら自然災害にとどまらず人災の側面が極めて高く、ことにこの東京の地に住む自分たちの生活や価値観を厳しく問うものであるということです。このように自分たちの課題と密接に関係し、また日本社会の矛盾や傲慢を露呈した東日本大震災に向きあうことは東京教区の使命のひとつであろうと理解しています。具体的には下記のような取り組みを行っています。

- ・「午後2時46分の黙想と祈り」            《毎月11日 主教座聖堂》
- ・日曜日「夜の祈り」                    《隔月第三日曜、教会グループ持ち回り》
- ・被災地を巡り、被災教区教会で祈り交わる旅の実施    《今年は6月》
- ・東京に避難している方を今も継続し応援するグループや諸団体を支援《後方支援》
- ・諸教会での支援や被災者を憶える活動、チャリティなどを応援《情報の収集・提供》
- ・教区内における関連情報の共有《「お知らせ」や「災害情報」など連絡手段の整備》

## 2. 他教区の災害に、東京教区はどう臨むことができるか。

- ▶どう支援できるのか、隣人とどう向き合うか。何が出来／出来ないか考え取り組みます。
  - ・災害時、管区や当該教区との連絡窓口業務    《4月に発生した熊本地震への対応》
  - ・教区対応方針(常置委員会)の検討に必要な情報の収集    《 同上 》
  - ・情報の教区内共有業務            《地震・水害・台風などの被害状況の情報伝達》

## 3. 東京教区が被災した時、信徒、教会、教区教役者はどう行動し、どう立ち上がるか。

▶被災した時「私たちがどうあるか」について、どう考え、心構えしておけばよいのでしょうか。実際の被災像が前以てはつきりするはずもなく、対応策や答えが出せるものではありません。しかし、何らかの対応や決断(する・しないも含め)について、信仰の仲間が教会で少しでも思いを出し合って考えてみることは、私たちが、いずれ直面する被災と向き合い、教区が立ち上がる際の力になるものと思います。首都直下型の巨大地震がいつ起きても不思議でないと言われるなか、冷静でいられる今のうちに取り組みを急ぎます。

### 1. 災害時「自分・信徒」の被災地域における生活はどのようになるのだろうか

～自分(や身内)が無事で居なければ人を助けることはできない～

### 2. その時、「教会」はどのようになるのだろうか

～教会固有のこと、地域のこと、災害リスク(不安や懸念)を教会で考えましょう～

### 3. 今のうちに、「教区・教役者」として考え整えておきたいこと

～災害時の「態勢や機能」整備に着手。平常時に教区で共有できる情報を提供する～

日本聖公会東京教区

災害対応デスク 03-3433-0987 e-mail: saigai.tko@nssk.org